
コト姉。

白紙描写

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コト姉。

【Nコード】

N9554Z

【作者名】

白紙描写

【あらすじ】

『殺人しましょ。』で、主人公コトシラが実のお姉さんとただただ単に、人を殺してく残虐エピソードです。手始めに弟から殺しましょ。

「真剣な話、一度でいいから、人を殺してみたい物です。姉さん！」

目の前には、おれの姉がいる。

おれは、誰でしょう？おれはコトシラです。

おれは、無断で姉の部屋のドアをこじ開けて、中に入り、絵を描いている姉に話しかけた。

「？なんの話を持ち込んできたのかしら？不思議極まりないわよ？コトシラ。」

おれは、姉さんにしか、相談できないと踏んで、実の姉に…話を持ちかけているのだ。

おれは、人が嫌いです。
でも、姉は大好きです。

その名の通り、相談できる唯一の頼みは、お姉さんしかいないのです。わがままですけども。

「おれ、どうしてもやらないうけない。相手がいるんです。どうか、頼みます。姉」

深刻な悩みです。普通人を殺めるなんて、行為が許される世界ではないとわかっています。理解していません。けど、どうしても、どうしても…殺したい相手があります。しかも複数。

「なにをやるのかしら？まず、そこから説明捨ててくれる？」

真剣に、訊いてくれるようだ…本当に助かる。親切で優しいお姉ちゃんだ。

1 (後書き)

すぐ更新します

「とりあえず、誰からぶつ殺しましょうか？」

最初からその言葉を振って、おれに戸惑いと躊躇を与えるように持ち出した言葉に見えた。

「そんな潔くていいんですか？もう少し、焦らし揺さぶってくださいよ。…殺人は駄目だと」

野獣と人が敵対し、共同するこの世界。少なくとも、他殺はよくあるこの世界である。

そこには、おれらの町があつて、村があつて、家があつて、そして、ここが姉の部屋だ。

姉は、絵を描くのが好きらしい。そこら辺、部屋一帯は絵と紙だらけだ。何の絵を描いてるかだつて？

それは言えない。

言う必要がないからだ。

正座しています。

「あらあら、その言い様は何なのかしら？…弱気とか、そう言うのは止めて欲しいのだけれど、」

と言うけど、正直の所は、もろに本気です。それ以外の面持ちでは言い出せませんですよ。

「止めます。と言うよりは、初めから本気です。そりゃもう、全力です。」

「いい心がけね。」

誉められるほどでもない。

あ、誉めてはいないのか。

「心がけはいいません。信念です。ムカつく奴は、土に埋めるのが正しいと信じてます。我が地方の名残ですよ。」

「そのような名残が有るのなら、私も土に埋まっています。」

恨みを買われたこと有るのかな？

…そうか、なる程、それが怖くて、毎日家に部屋に引きこもって、なんやなにやらを創作していたのか。

頷ける理由。

「怖くて、外に出れないんですか？姉」

唐突にも、適当に話しを持ちかけた。

「現実逃避がしたいの」

すぐ答えてくれた。

「現実逃避って何ですか？感じが難しいです。」

おれの実年齢は、11歳で小学生五年生と言ったところですが。けども、この世界に学校なんてないし、プールの授業なんて物もありません。

付近の湖が海だと思っていました。

でも、お父さんから聞いた話だと東北四百キロに海存在するとしてました。

人間知らない物は、概念から知らないようです。

「この世界の否定です。」

「まるまる否定するんですか!？」

「いえ、分かりやすく纏めただけです。あなたは、小学生だから分からなくてもいいのよ? コトシラ」

小学生ではない!

小規模機関第二百五機関中立機関だ。

この王国の国立機関学校の直属直轄生徒だ。

嘘です。狩人の卵です。

「分かってみたいです。姉!」

「好奇心は狂気よ。それでもいいの? 後戻りは出来ないわよ?」

姉が凄い形相でこっちを見るので、そっぽを向けた。

悪魔と天使は、いったい何がしたいのか? 神の基準は信者の数で決まるのか?

そう言った疑問の深みにはまったような…相違や矛盾を会わせようと頑張る哲学者のように、

「何を考えてるの？ 以外と怖いわよ。コトシラ。…小学生らしい表情をしなさい。」

「殺人を犯す話を持ちかけた時点で、小学生の表情なんて出来ません。訝しげで険しい表情と言ってください。」

「言いたくないわ」

その拒否を発動した顔を見てると殴りたくなってくるけど、年の差と暗黙の格差で何も出来やしない。

それにしても、ペンキや絵の具のにおいがひどいな。ミネラルウォーターで筆を洗うところが姉さんらしい。

ゴミ箱の内側の内蔵がペットボトルの墓場になってたし、

ここからは確認とれないけど、多分そうなってる。

「一つ、話が脱線していようで、していないのだけれども、そもそも、どうして、そこまで人を葬りたいの？」

安易に直接的なことを言う姉。

部屋の温度が一気に下がる、それはあたかも、何かに縛りを利かした蛙のように、

「それ、言ってる言いの？姉さん」

「言っても言いけど、さっきみたいに地方がどうのこうのと言う寝

言はなしでお願いします、わ」

「わかった…」

息を飲む、ここで笑いを取ってしまったら、おれが誰かに殺される。笑いすら取れないけども。

空気をのむ、おれの信念、ム力つくだけでは説明不足。本当の正真正銘の真理を言う。てか吐き出す。

怒りや恨みだけじゃない、もっと大きな理由。

それは

「自分が嫌いだからです。」

「？ よく聞き取れませんでした、もう一度言ってくれませんか？」

姉は椅子に座り、こちらを見下すようにしているため、言う通りにする。

「自分が嫌いで、自分は人で、だから、人が嫌いです」

ずっと自分に愛想尽かしてた、俺だけじゃあな筈、日本人なら殆どそう思ってる。

俺たちは日本語を喋る異世界人だが、きっと日本語を言える人は、考え方も微々に似てると信じたい。その案だ。

「それは、人が嫌いだから自分が嫌いと言っているの？」

逆転の発想は、哲学者とかがよく駆使する類だ。

同じことを言ってるだけだけど、

「全部嫌いです。そこまで言いますか？ 言いますよ」

「可愛い脳味噌してるのね。弟として、ここまで完成された稚拙な思考を持っている弟は初めてよ。嬉しいわ…お父さんに感謝しようかしら。」

おれを生んでくれた母と父に両方に感謝してよ。

なんで、父さんだけなんだ？

深く考えないことにした。

「おれは嬉しくない、けど、楽しいし面白いではある。この世の生まれきて…」

「あなた、神経どうかしてる…あ、人を殺めようとしている人に、正常な人はいませんね。」

「姉さんも引きこもっているだけですし、何をやっているか？と聞けば、紙一面に、豆腐の絵や牛乳だけの絵を描くだけですし、人として歪んでいます。」

ついに、言ってしまいました、禁句とされる一言を…

恐らく、この言葉に姉はこっぴどいおれを下界の地獄に馳せらせだろつ。

「人がいなくならないと、平常心を保てない？コトシラ」

人が今より少なければ、より良かったかもな人間関係的にけど、この世界も人が多すぎる…

あ、悟った。

なる程、おれは人が嫌いな訳ではなくて、人によつていただけなのか…

「気づきました！姉！俺は、人に酔つていいだけです！すごいです姉」

気づいてみれば、簡単なことでした。人の居ないところへ行けばいい話だったのです。

「…それで？ あなたの今の意志は…何？かしら」

頬杖ついて、纏めてくくつて、訊いてきた。
勿論答えは、

「人を減らせばいいんです。何処かへ逃げるなんて出来ません…
手始めに、弟から行きましょう。」

訂正はしない、決意表明をしたにすぎない。

「あはは、やっぱりそつちに繋がるのね。面白いわ。なら決まりよ。私も協力してみるわ」

「是非お願いします。」

なんだか、意味がおかしいけど、成り行きつて奴に任せます。だって、結果が欲しいし、嫌いな物は嫌いだから、

姉は、椅子から立ち上がり、筆立てを盛大にぶちまけた。

「散らかりました。誰の仕業かしら？　ね？　コトシラ」

「おれが言えるのは、姉自身がわざと蹴り飛ばしたと見受けられま
すので、姉の自業自得です。」

お茶目にどじをした…とは言えませんが。だって、大切すぎるほどの
存在である姉さんを体の低い個性の位置づけをするのは、おれだけ
の判断ではまかなえません。

おれは、誰よりも姉だけは認めます。
従います。頼みます。

「そうね。私がすべて悪かったのね。なら、私は筆以下の存在で良
いわ」

位を下げたのか？

意味が分からない。…おれをあざけ笑っているとか、か？

おれの中には、姉しかいないから、姉はおれを弄んでいるというの
か？

位を下げるというのなら、おれも下げないと…

止めた。そうなら、そうであるのなら、おれが姉を虐げることだっ
て出来るじゃないか。

「そこからの結論だと、姉さんは、俺の道具つてことになりますよ
？　それでもいいの？　いじりますよ？」

おれはバカみたいなことをいつてみる。

この言葉に『扱う』の意味が込められてはあるけど、協力してくれるのは姉さんの方だ。下手に出るのが当然なのに、弟なのに、ここまで自分勝手な言葉は、生まれて初めてだ。

いや、もう口にしたから、生まれて初めてだつと訂正すべきだな。

「馬鹿なのは私の方です。あなたの方がずっと優れてますよ？」
コトシラ。」

言ってくれましたね。とどめです。

姉さん本人は、計画案立ったのか、偶然の口だったのかは、皆目見当もつかない。

けれど、心を読んでいるとしか思えない。言動。

心の内を覗き込む、人心読解力。

偶々と言うことにしよう。

「おれは優れてはいませんが…ね？」

床に転がる筆を手にしたコトシラ。

この行動に意味はないけど、コトシラは何となくで手にしてみた。

「あらあら、自分の価値を低く受け取るのね。…なら、『よくできている』って言うのはどう？ 文学的ではないかしら？」

良くできているとは、何だろう？

そして、何故そのように、そのような言葉がほいほい出てくるのでしょうか？

おれは、文学よりも数字の方が好きだけどね。

「一つとしていつてみては、おれがよくできているとは何ですか？」

難解授業の答えよりも気になる…言葉回し。

一言言つて、おれの方が教わる側で教える側ではないことは、いつも通り知っている。なので、

人の話を聞くときだけは、凄いですよ。

人間メモ帳です。自称するくらい自身があります。

「その質問を今、答える必然性はないわ。…あなたがそれを認めるか、認めないかを私は知りたいの。」

何を理由にしてそうなったの？

あ、おれの価値観についてか。なら、答えは一つだけ。

「認めません。おれは良くできていないから。それと、狂っているから…」

そう、自分のそのままの言葉だ。

おれは狂っている…人で居てはいけない。と言うことで、人を殺めます。

減らします。

そこが、よくできているの…

「ん、何か、叫びましたか？」

「何も言っていないわよ。あなたは殺人的だと言っただけよ。」

「言ってるではありませんか」

「そこは保留します。と、時間がもつたいなく感じてきましたから、今から始めようかしら？」

訊かれなくとも、おれは筆を片時も離さず、正座から直立しています。

もう今からでも、やれますよ？ 筆で…

「見てごらんのように、もう準備は整っています。やりましょう。姉」

「いい行動力ね、見込み通りよ。でも、筆だけでは、眼球くらいしか潰せないんじゃない？」

物理的に、力のある人でも、簡単に人を殺せますが…生憎、持ち合わせている人物は、子供と女性、…どう見てもやられる側の人材である。

「そう言われなくとも、筆で肉を貫くのは困難でしょうし、皮すら外壁ですよ。」

筆の強度と鋭さを軽く見積もっても、あの弟を殺すことは不可能です。

弟は言ってしまうえば、俺より強い。

あ、でも、筋肉とかで、攻守を増強しているわけではないです。

単に、狩人の血が強く、頭もキれています。

オールトータルに、万能な人と言いましょ。

それが敵。外敵です。

「嫉妬心だけで、筆を用いて殺すのもやぶさか不満でしょうし、攻

撃力不足です。あなたが、どれほど、力があっても弟には勝てませんよ?」

言い回しが解読できない。

つまり要するに、筆と腕力を増大させても尚、弟には勝てないということを良いついのだろう。

…

…ぶ、当たり前の言葉ですよ。

筆で人を殺せたら、書道界に衝撃と衝動が揺らぐこと間違いなしですね。

「小難しい言語ありがとうございます」

「いえいえ、どう致しまして…あ、良い物がありましたわよ? これはどう?」

これはどう?と蟠るおれに、差し出されたのは、コンパスでした。

「コンパスですか? 考え物ですね。…確かに、筆とは数段階上等の製品ですけど、人を殺すほどの殺傷力があるとは思えません。あと…」

あ、いや、ここは全然言える立場ではない。これは言うべきではない。

コトシラは、言葉後半言いかけた言葉の意味を理解して、口を閉じた。

「あと?何か、言いたそうだけど、…何なら、言ってくるれかしら

？ 気になります。」

気にしないでください、気に障りますから、自分に対して…

「言えません。これは使えますよ。姉」

すぐさま、話を切り替えたが、流石すぎる姉はそれ以上は詮索しなかつた。

「どこが使えるの？ 只の文房具じゃない。それとも、最近は何で人を殺めるのが流行りなのかしら？」

話を合わせてくれる気配は無し。正直の意見でしょう。

あきらめていましたが、やはり、文房具は質の悪い狂気にもならならしい。

「文房具類は諦めました。」

素直に言ってしまうえば、それでおしまいのことだった。時間が勿体なかつただけでした。

「それでいいのよ。なんなら、王道に任せて、包丁はどうかしら？ 日本の拳銃よりも殺傷力高いわよ？ それに、すぐに手に入られる。」

王道が一番安全で、成功率も高いと訊かれる。おれはそれさえも、背きたい。

「包丁は、返り血が付着します。王道な理由で片付けます。洗濯が大変です。」

「捻りが欲しい。こんな物でも、息耐えるのか！って奴。」

「サランラップ」

「笑ってしまいます。」

「水槽の角」

「水槽がないです。」

「事故死」

「運命は変えられない物だと思います」

「ネタ切れね。」

「少なすぎる持ちネタだった。」

「笑い殺しとか、無理ですねよ？」

「姉さんが殴って殺してください。」

「本気にはしてなかったけど、何となく、言ってみたくなった。」

「私の体を見て、そう言ってるの？」

「体育会系ではないのは明らかだった。」

「言つなれば、貧弱そう。」

「意外性ですよ。そんな魔法でも持っているのかな？と思って……」

「みる世界を間違ってるわよ？ 魔法なんて使えないけど、そんな系、合ったじゃない？」

どさくさに話がよからぬ方向に直進する。

「科学ですか？ そんな回りくどいことは嫌いです。…もう、椅子で良いです。姉さん椅子借りますね？」

呆れて、そうすることにしました。

「あら、そう…」

「今日は、親が留守ですから、丁度良いところに杓文字が有るって所ね。」

台所へ向かったと思えば、馬鹿な考えを実行する。態とと言うのはもう間違いらしい。

計算してるとも、思えなくなってしまいそう。真性とも認めたくない。

これは誘導人証しているに違いない。

ややこしくなってきたから、考えるのはよそう。

「杓文字では、蒲鉾を切断するのがやっとだと思いますが、…しかも、すっごい切れ味の悪さで…本当に出来ますか？」

訊いてみる、おれの左手には姉の座ってた木星の椅子。

歩く度に、床とスリ引きずる音がする。気にしない方がいいのか、静かな二階建て一般住宅に、鳴り響く。

それと、ここまで語るところも語りたい。…姉の部屋から階段を降りる際、騒音がとてもじゃないけど、五月蠅かったです。

姉に『片手引きずるのは止めなさい。』と優しく怒られたが、おれに、そのような言葉を今更、言う方がおかしい。

おれは、人間として終わっているので…

「叩いてなぶり殺すのなら、可愛いと思わない？ その理由です。」

「可愛いさの問題ですか、別に、可愛く無くても良いし、姉に、杓文字は似合いません。…姉は、そうですね。釣り針が似合います。」
決るようで地味な道具、魚類なら『し』の字の悪魔。文字通り、『死』を意味しています。
これまた難題で、どう利用して人を亡き者にするのか？ が一番の課題。

まあ、釣り針なんて、買ってくるの面倒だから、語らいで終わらせますけど。

「釣りは好きではないの、私。言うのなら、泳ぐのが好き…かもね。」

昔は湖で泳いでいたとか、今は知りませんが、よく泳いでいたので好きになる…とは、あり得るかも知れませぬ。

「おれは、泳ぐのは苦手です。泳いだあと、風邪をひいたり…何てことよくありましたし、」

「それは知ってますよ。コトシラ、あなたはよく、風邪をひいていました、弟と違って、病弱だから…よくよく看病したりしてましたわ。」

お母さんより、お世話さんだ。

おれには、そうされた記憶がないのは、何かの陰謀かも知れないな。

ガジャ

ギギ

椅子が引きずれる。

「とりあえずだ。姉、その凶器で本当に、いいのか？」

確認、今の時間の進行具合だと、もう時間切れだから…杓文字でいい。

杓文字が人をホフる程の殺傷力が無くとも、姉事だから上手く使ってくれるはず。

絵を描くのは、空間を掴むって事だ。

人間の構造も、絵を描写するのと同じ要領で、把握し、ピンポイントで突くことだって出来る筈。

物は試しだ。

杓文字で死ぬ人間も見てみたいしな。

「あら？ 少し前まで、否定や拒否を行使していた、にも関わらず、今度は肯定ですか。心がコロコロ変わるのね。コトシラ」

コロコロ変わるのは、場面と時間系列だろ？ それに合わせて、人が動いているようなもんだ、大きくは言えないけども。

「時間がないんだよ。そろそろ、弟が帰ってくる時間だろ？」

4時56分。五時丁度に帰ってくる訳ないし、もしかしたら、今来るかもしれない。

心の準備も必要で、殺す準備も重要。

…トリックや殺人装置を配備するわけではないけど、玄関付近で待ち伏せして、律儀な弟が靴を靴箱に、収納する背後を狙うのだけど、

兎に角、ゆとりの時間は合った方がいい。
その案だ。

「かしこまりました、じゃあ私は、夕飯前のおやつでも作っておくわ。弟が来たら呼びに着てね、すぐさま、トドメを刺しますから…」

「うん、心強いよ。」

…

コトシラとコトシラの姉は、自分達の持ち場につき、弟が帰宅するのをまちまちと待った。

一方、その頃より少し前の弟と言えば、草木が生い茂る、村のはずれの狩り場で化け物を狩猟していた。

ブギヤシャリ

「二十三頭目ですね。あと、一匹で三の倍数になって、歯切れがいいと思いましたが、残念。時間切れです。」

いつもながらにして、10分後行動を心にかけている、コトシラの弟は、今日も歯切れが悪い狩猟数で用事を終える事になりました。

週に三回の炎狩猟部の部活は、とてもきつく生半可な気持ちの持ち方では到底、続けることが出来ません。
継続は、大切だと弟は心にかけています。

その甲斐あってか、近所で噂の天才児と発展している様子です。

部活動のメンバーは六人です。

ここでは、メンバーの名前は伏せておきましょう。

「お、コトヤ。今日も前にまして、歯切れの悪い数値を叩き出すじゃないか。…しってつか？ 二十三は、素数なんだぜ。」

と、コトヤの所属する炎狩猟部の副部長、が清々しく話しかけてきた。

「馬鹿にしているの？ 僕は、そこまで狙った数値は出せないし、自己ベストも、更新しちゃいないよ。そもそも平均値と同じくらいだし。」

一般人は、七時間に、十三頭くらいが妥当なところだが、コトヤと言う者、およそ半の三時間半くらいで二十三頭討伐してしまうのだから、言葉って言うている以上、凄いことなのである。

他の部員に比べると、やや、慎重すぎる面が有りはするがそれでも尚、結果と成果は上位副部長と互角の格差だ。

誰も文句を言わない実績と言える。

「はっ、均衡を重視するおまえの台詞は、俺からしてみればクソ喰らえだ。…俺なんて、19匹ぞ?!、お前と2の倍数差で負けているだ。文句の方が先に出たがるからやっつてられない。」

副部長は、結構飽きやすい性格してるから、途中半ばで、立ち昼寝とか、立ちうたた寝とか、闘いながら寝る事だっしてしていた。

この人も、十分、人から文句を言われる闘い方しているよ。

「文句は言ってもかまわないけど、僕はそれよりも、副部長さんの顔の傷がおぞましいです。」

一昨日の部活の話し。

副部長さんは、いつも道理熱心に、狩りをやっていたのだけれど、突然現れた一級化け物に意表を突かれ、顔の深々と傷を負ったのだ。

顔が横にスライスされたようです。

きれいに、出来た顔の地平線が思いのほか、おぞましく映ります。

元々顔つきの悪かった副部長さんですが、その件で一段階、飛びつきりのある顔力を誇るようになりました。

「うい？ 何か文句でもあるのか？ 悪いけど、もう俺は文句を言えない立場になってしまったらしいんだよ。」

「え！？ どう言うことですか？」

いつも僕だけに文句を言ってくれる、副部長さんが今回に限って、文句を言わないなんておかしい。

顔つきがおかしくなったから、頭も可笑しくなったと言う理論を、誰かが証明してくれたら、僕も潔く、躊躇い無く認めるけど…

本当に、どういう事でしょう？

「おい、「ロイヤ」

なぜ、理解できない内に、僕の肩を叩く副部長さん。

何でしょうね、この感じ、しんみりとしますよ。全く、次の言葉に、驚かされた。

「お前が今日から、副部長だ。今日から、俺の名は、稲荷口と呼んでくれ…」

イナリグチ。

初めて、副部長さんの名前を聞いた気がした。

何時だって、副部長さんは、『俺の名を呼ぶな！ おれは、副部長さんだぞ！』怒っていましたからね。

「イナリグチでいいんですか？」

飲み込みの早い僕は、再度、確認した。

「よお、副部長さん。」

そう言ってくれるイナリグチ。

僕の名前を差し引いて、副部長さんとは、つくづく、僕も成り上がったものだ。

「そんな事言わないでくださいよ。半分、本気にしちゃいますではありませんか。」

僕はそういう、何、なんて事ないよ。

僕は僕自身の力を知っている。

副部長だなんて、柄でも器でもない。

僕はただの普通の人です。

「本当の事を言っているだけ。ほら、思い出して見るよ。この傷を……」

イナリグチは、自分の顔の傷をなぞる。

痛くないのか、綺麗に沿っているのか、何ともない表情を見せる。

「昨日の大怪我だったのに、ここまで回復するイナリグチさんはやっぱり、ただ者じゃない。」

僕はそう確信付けるしかなかった。なぜなら、僕にとってのイナリグチさんは、副部長さんだからだ。副部長は何時だって、強い人やタフな人何だから……

「この傷の事で、部長に愛想尽かされちゃったりしてしまったんだ。…そして、その結果、俺は副部長を下ろされる羽目になったんだとさ。候補にお前が配属される。」

嘘みたいな話ではある、あの頑固で堅い部長さんが、僕を選ぶなんて…いえ、それ以前に元副部長のイナリグチを下ろす事自体、不自然だ。

嘘だと言いつけることは出来るとして、嘘じゃなかったときは、イナリグチさんを疑うことになる。ややかしい限りだ。

「それは本当ですか？ 僕は信じますよ？」

「信じさせる義理はない。な？ 副部長」

僕を見て副部長と呼んだ。これは決心付けさせる言い方なのか？ そうであるつ。

「じゃあ信じます。…あ、そうだ。僕、これから、五時までに家に帰らないといけないんだ。だから手伝ってくれるかな？ 獣の死骸集め…」

僕が部員を操る事なんて出来るのか、確かめるための指示だ。別に、従ってくれるとは思っていない。従わなければ、それまでだったと言える。

「分かりましたぜ、副部長」

とイナリグチさんは、僕の話聞き、素直に従いました。

僕は身を疑い。一瞬思考停止し棒立ち状態で佇んでしまいました。辺りは、肉片と血肉の海です。

無論、それらの破損物は全て獣の物です。決して、人のものではありません。

それを踏まえても、この光景は異常。血や肉を目に移すのが苦手な人や免疫のない人はみない方が思われるほどの残虐で酷たらしい光景。

異常な光景でも僕たちにとっては、いつの通りの景色。

慣れれば、それまで…でも、僕は初めから慣れていました。

その理由はおそらく、遺伝だと思う。大抵の人は、皆、こんな景色ばかりしか見ていない。

だから、遺伝子から慣れていましたのだと思う。

いきりためですからね。獣殺しは、

…

掃除をするとは、この臓物から脊髄までを綺麗に片づけること。

その際、使う道具とは何だろうか？ 決まっています。箒です。

箒でこまめに、生ゴミは集めて、袋に詰めるのです。単純過ぎますが、これは掃除であって、アイデアを駆使する場面でもありません。

綺麗に元に、戻すだけですから…

「副部長、集めましたよ。」

イナリグチさん意外にも、部員はいて、さっきまで空気のように関

わかっていなかったがここで一人登場しました。

処理班担当のマカルとカイロです。

マカルは女の子で、美しい人柄。

カイロは男の子で、親切な人柄。

どちらとも、死に対して、全くの恐怖を抱かない。心の死んだ人たちです。

可哀想な人たちです。

家柄が響いて、死ぬまで闘うように産まれたときから、色々な事をやらされてたようです。僕には理解できません。

どうして、死んだ人間を造りたいのかを…

「あゝ、マカルか、すまないがおれは副部長ではない。今日からあいつが副部長だ。分かったか？」

イナリグチは、僕の立っている方向に指を向けた。立っている場所に出はなく、僕に対してだ。

「分かりましたよ。」

必ず、尾語に『よ』を付けるのは、彼女なりの個性の出し方なのであるうか？

気にしても、気にかけても、あの二人は死んでいるので興味が無いが、一応、個性として受け入れよう。

カイロは、独りで会場の草をむしっている。滅多に喋らないのが、

彼の個性と思う。

部活は、部活の為に用意された試合会場が設けられている。基本ただの空き地に、フェンスで囲ったような安い造りになっている。

土は栄養分が不足して、砂に近い。でも、雑草だけはのびのびと育つ。矛盾しているとも思うし、嫌がらせにも思う。

まあ、雑草にどんな感性を抱いても、どう思っても、カイロが引っこ抜くだけだから気にしてはいない。

フェンスに囲まれた空き地の中央には、穴が存在していて、そこから、化け物達が湧いて出てくるシステムになっている。

餌は化け物をおびき寄せるフェロモンのような物で、穴は、森に繋がっている。

と

どうのこうの言っているけど、結局は、暇つぶしの地方が用意した遊具なのですよ。

「副部長、このゴミは、ドコに運べば、いいのよ」

持ち運ばれたのは、化け物が持ち込んできたのであろう、ビデオデッキである。

どうしようもない、普通のゴミだったのでコトヤは悩んだが…

「燃えないゴミと書かれた紙が貼られたアルミ箱に、捨ててきてくれればよいかと…」

これが副部長、初めての仕事だった。

「分かりましたよ。」

テクテクと、小走りでどこかへ消えてしまったマカル。

大丈夫だろうか？ 今日には燃えるゴミの日じゃなかったし、とうにゴミ収集車は今日の仕事を終えてるし、と不安をつのらせるが…とうにかなるだろうと、随分適当に決めつけたコトヤがそこにいた。

ふと

「おい、みんな集合しやがれ、今の職場もすぐさま放棄しやがれ、さっさと来い！」

若干、怒鳴りつけるような大声で収集を促すのは、頑固で奇天烈の部長だった。

僕も、副部長気取りを止めて、会長の所へそそくさと、向かった。

「よし、皆、集合したようだな。俺自身は嬉しいぞ。よしよし、みんないい子だ。死んで良い人間なんて、この世にはいない。」

とんでもないことを言うのは、会長の癖だ。大袈裟と言わざるを得ないお人だ

僕はこんな人は嫌いですから、気にもとめていない。

「みんなの本日の成績発表とする。成績発表を言ってから、もう一度、作業に取りかかってくれ、後は自由解散だ。理解したか！」

ただのうるさい人でもある。こんな人が部長だなんて、幸せ者ですね。恵まれてる人ですね。

「では、出だしの一発から、一位を発表したいと思います！」

テンションだけ高い上、発表とか言ってる。一番、早死にしそうな人一位ですね…この人は。

「52頭で、ダントツ一位のタカキ！です。」

僕の数の二倍はありますね。仕方ないけど、才能には勝てない。超えられない上、タカキ。

武器がS字フックのみで、戦う…僕の目で今までみた中で一番の狩人。

ここまで徳化された人には、僕はなりたくない。

「そして、二位はこの俺自身です！」

そうですね。期待道理でした。期待を裏切ってくれないのが部長と言つのも知っている。

副部長となつてなおさら気づく。特性。

「次に、コトシラ弟！頑張りましたね。今日からその努力を認めて、副部長です！パチパチ」

そうですね。嬉しくありませんけど、イナリグチさんが認めるのな

ら嬉しいです。

僕の帰路を踏みしめる足取りは、軽やかとはほど遠い、披露の一途だった。

今日の出来ごとは、多いものじゃなかったけれども、多分、大きいものであったであろう。

副部長になって、副部長気取りは止めておきたいからな。気取れば、僕自身も積み上げてきた物がおかしくなる。きつと、この後で何か、悪いことでもあるのだろう。

良い事の後に、悪いことが起き得るとは、なかなかあり得そうな物言いだ。

起きると思えば、難でも起きそうだから考えない事にした。

コトヤは、自分の荷物。主に、部活で使われた長太刀だ。刃物等は低調に取り扱っている。しっかり、スチール製の金物用品収納ケースに収めて、担ぐような形で背負っている。

筋力に自信が無くとも、そこをどうにか、非物理操作でどうにかかなう。

僕の特技たる平均化は、うまく使えば、電車より速く走れる。

様々まばらに、天才だとか、才能が有るだと言っけど、僕はせいゝ人間なだけなのですよ。笑えますね。

一人歩きも、寂しいものです。

家に帰れば、兄さんや姉さんが居ます。

兄さんは、僕に優しいけど、姉さんは少し距離を置いてるようです。二人とも、どうも昔から僕を嫌っているようですが僕は好きです。

家族ですから、

それでも、良い家族だから。

「そう言えば…」

今日は、父母たちは留守でしたね。

なので、今日は僕たち兄妹だけですか…

…たまには、それも良いかもしれませんね。

兄妹だけの夕食パーティーですか。

兄は、酷く憎んでいて、反発的に優しくする。

ちよつと、異質な姉は、僕だけを避けているのではなく、自分以外の人間と接するのが苦手なだけかもしれない。憶測ですが…

それらをふまえて、夕食パーティーです。

コトヤは、気づかぬ内に、家の前に、立っていた。佇んでいた。

「ここが我が家。」

普通の家だ。感想は以上。

すでに何年も、見慣れた造形だ。

そうですね。家です。

玄関の扉を開いてみせるコトヤ。そして、すぐさま、担いでいた鉄パイプのような武器ケースを靴箱の隣に備え付けの傘立てに立てた。

「ただいま、」

物静かな、玄関付近。台所付近では何かを作業をやっている模様だ。まな板を何かで叩く、音が聞こえる

包丁だろう…

思った。思ったがしかし、誰がその音を奏でているのか…一目にして、見ないと分からない。

誰も返事をしてくれないそうだった。

僕は靴を、足から抜き取り、靴箱へと戻す。

…すると、僕の視覚から、思いも寄らぬ何かが、振り下ろされた。

バグチャグサリ

音は高々だ。

なにが起きたのでしょうか？

知りませんが、分かりませんが、おそらく…頭が痛い。

痛いだけなるよかった。まだ、許される範囲です。でも、何でしょうね？ 頭上がなま暖かいです。

バシヤゴリ

首が曲がりそうですよ。痛いとおり越していますよ。死ぬ痛みと同じですよ。

どうにか、誰にか、助けともらいたいですよ。

「あれ？ 結構、人ってしないない。生き物だったのか…気絶すらないな」

当たり前です。僕は、死と紙一枚で、ふれていたのですから、死に筈が有りません。木製の椅子だけでは、死にません。

「なら、これでどうだろう？」

グチャリ

ぐぐぢぢ

僕の兄はなにを考えているのだろうか？

まさか、僕を殺そうとしているんじゃないだろうか？ 僕は腹部をえぐられても死にません。処置をしないと死にますけど。

「兄さん？ なにしてんですか？」

僕は一言訪ねてみる。確かめる方が早いからだ。なぜ、木製の椅子の破片で、腹をえぐるのか…疑問です。

「てか、お前の心境が、なにしてるんだよ。お前本当に死ぬぞ？」

ぐぐぢぢ

ぐぐぢぢ

ずすず

引いたり、伸ばしたりしている。なににも感じない僕は、本当に死なないじゃないかと思った。

しかし、

「何やってるの？ コトシラ、そんなんじゃ、死なないわよ。」

なにやら、杓文字を携えた姉が現れた。

何をするのだろう？

ジャコ

じゃこ

ぐしゃぐしゃ

ずすずぐぐぐ

杓文字にこんな使い方有るとは思わなかった…手の感覚がない。足の指を動かすが、やつとだ。

「？何か言いたそうね？ 素直に言ってみたら？ 弟さん？」

僕の機能するはずのパーツがぐちゃぐちゃだ。でも、なんでか…満たされている気分だ。錯覚だろうか？

「が…い……………うあああ」

言語がままならない。その理由は、もしかすると、僕の機能するはずの人がぐちゃぐちゃだからだろうか？ きつとそうなのでしょうね。

うまく喋れないのはそのせい。

もう喋るうとも思わないけど。

「ここまですると、虚しくも思えるな。人って、死ぬと努力も無くなるから、困る」

かといって、生きすぎるのも困る。

これ、僕の意見ね。

もう、僕は手遅れだと踏んで、何もしなくなった…姉も、兄も、…ただ杓文字だけが喉元に突き刺さっているだけだった。

「殺すかは、消費者と同じ考えだからね。提供者や生産者の方が難易が高いのかもしれないね。」

なにを言っているのでしょうか。姉さんは、僕は百円均一の玩具ですか？

そうか、その程度だったのだと、うん、すっかりしました。

さようなら。

コトシラの弟は、死にました。

数分後。

「こんな、あつさり、死んでもいいのかしら？ もう少し、あらがってもよかったのにね。」

「ひどい事言いますね。実質上、ひどいなどと言つ言葉を使えない立場では有りますが、」

俺たちは、残飯処理と同じ事をしていた。人間で。

「早く死んで欲しかったと、思っていたでしょ？ 本当は、」
簡単に死んでくれた所為で、杓文字でも人を殺せるんじゃないか、と仮説が実証され始めましたね。
けども、

「思っていた。思っていたけど、逆に、弟にしては、かなり早すぎる死だとは思います。『あの弟が簡単に死ぬはずがない』そんな感じですよ。ぜ」

基本、おれより、力のある弟がなぜ抵抗しなかったのか…そこが難点である。解けない謎、大袈裟か…

「早くしにすぎたってわけ？ 理想じゃなく、現実で？ うう、あなたの考えが分からない。」

「どう言うことですか？ 例えば、なぜ抵抗しなかったのか…の部分ですか？ 疑問ですよ」

人なら、死ぬと分かかって、わざわざ、死に急ぐなんて、頭が可笑しいと思えない。

「簡単な話よ。『彼はあなたの弟』で居たかったのよ。」

あ、思い出した。

兄は家に帰ると、弟を虐めるのが日課だと、殆どの兄が言っていた。

つまり、虐められないの弟じゃないと言いたいのか…
いじめの範疇を超えてるけど、

「弟だから虐められると、そう言うことか？ 姉」

「それも一理あるけど、気持ちよかったんじゃないの？ ただ単に…」

「え、なにがですか？」

「殺されるのが…かしら、」

真面目な弟だとは言っていたが、虐められるのも、真面目に受けなくともいいのだが…
仕方ないか、弟出し。

ゴミ箱にした。弟を

「でも姉、僕が風邪で苦しんでいるにも関わらず、平然と看病を続けるなんて…第三者の視点から見れば、ただの傍観行為と苦しみ見せ物にしかありませんが？」

意味のない言葉で冒頭を構築する。

冒頭部分を意味の意味の無い言葉で構築したがるのはおれの癖である。

「何を言っているのかしら？コトシラ。…人の苦しむ姿を見るのは、それを見ている本人でさえも苦しんでいるように思えるの、そして、苦しんでいない感じ…」

つまり、『うわあ〜痛々しい…』と感じるそれを楽しんでいると言うことですね。

よくわかりました。

「姉の台詞を頼りに、おれも、姉が苦しんでいるとき笑うことにしました。」

決意を改める。俺も、最低でも最悪な人になってしまったため、考え方や信念を変えるないといけない。

まずは、悪い人間のなり方を身につけないと、

「良いわね。…なら、あなたが死にそうな顔して、地べたをはいずり回っても、私は平然と熱いお茶をすする事にたわ。」

姉らしい苦しんでいる者への見方だ。
そしておれは、笑いだけで。
姉はお茶をすするだけ…

「…そう言えば、今何時です？ おれ腹が減っているのだけれども、」

別に腹が減っていることをアピールしたいわけでは無くて、時間が気になっただけです。

「時間的に、7時…腹が減ったのなら、先ほど作っていた作り欠けのピザがありますよ。」

と姉が言うが、おれは全身とはいかないが、ほぼ全身血まみれなため、風呂に入るのが先と思われる。

「ああ、わかった。風呂にも入りたいから、台所のピザをつまみ食いして、風呂にはいるよ。」

玄関で後片づけをしていた、姉とコトシラだったが、俺の方は血吹雪を直撃したあげく、姉のように、エプロンと言う防災服を装備していなかった為、本当に血塗れになってしまったのだ。

風呂場で服もついでに洗わなくてはいけない。

遣ることは、沢山ある。

「私もお風呂に這入らせて、…嘘です。」

なんとなく言ったのか、聞き取れませんでした。姉が言った台詞は恐らく、『生焼けのピザで腹を壊さないでね。』と言ったはずだろう。

おれは、テクテクと擬音をまき散らせながら、台所脇の風呂に足を踏み入れた。

勿論、ピザをくわえながら、

コトシラは、洗濯機が合ったり、洗面器が合ったりするスペースに、たどり着くと、すぐさま、みる限り血まみれな身にまとう服を風呂場のタイルに打ちつけた。

ベチャリ

微々にも、妙に生々しい音が風呂場に響いた。少し自分に対する罪悪を計っているようにも感じられた。

「とりあえず、タワシなどで洗っとくか…」

衣服の繊維も考えず、タワシを使用すると宣言した。一種の物への苛めです。

コトシラは、そう決めると、どこからタワシを手にとり風呂場へ向かった。

がらがら

左でがらがら鳴るスライド扉を閉める。

密室と化したシャワールームは備え付けのハンドルで一気に、煙る蒸気で空間を満たした。

シャワー

水圧を血にまみれた衣服に、与える。
あり得ないと言っばかりに、血と水が混じり、密室に弾け飛ぶ。

「あ、ええ、ある」

言語障害を起こすほどの水圧。爆弾と同じ威力か、最低でも放水車のそれほぼ同じ力を誇っている。
ノズルを持つ手がガクガクだ。

それでも、強烈に悶える衣服をこれでもかって言うほど、タワシで洗う。

ワシヤわしゃ

凄まじい勢いだ。今でもこの左手が、身震いして、…保っているのがやっとと言える。それでも、それだからこそ洗う。弟の血を根こそぎ荒い。弟と言う存在を無かったことにしてあげる。

これが唯一、俺が弟にしてあげる行為だ。
許せ弟、なんて生暖かい言葉は掛けたりしない。おれは、なま暖かいような言葉を与える人間ではないからだ。おれは、俺の出来る最大の厚意：つまり、弟の染み着いた衣服を洗うことに繋がるのだ。

おれは、弟が憎かったから、殺した。弟は兄に従わなくてはいけないから死んだ。そして、弟の存在を無くしたいと思えば、…弟もきつと、分かってくれるはずだ。

これはあくまで弟のためなんだ。

数分後、コトシラはその活気と勢威を使い切り、疲れ始めていた、言うなら朽ちていた。

シャワーのノズルを壁のあのソケットに掛け、品もなく、口に水をためていた。

これでもか五年生だ、…まだ許されるはず。
そうコトシラは思った。

「湯に浸かるか…」

なんだか遣る気でないコトシラは、その巨人のような足取りで湯船につかる。

まだまだ、呆けている。あどけなさが残るコトシラでも常日頃の教訓を経て、日々進化している。

その先にある立った物は、殺人出したなんて言えない。親にだって言えない。

姉にだけは言えた、逆に、姉がいなかったら、いつも通りの日々を過ごしていた。

誰もが言う、退屈な日々

何だろうか…体は暖かくても、心は寒いようなこの感じ…

後悔している？

とでも言うのだろうか…

言うのかも知れないな。

後悔先に立たず。

後悔する理由は一つだけ、冷静に考えてしまうからだ。

冷静に考えなければ、人は早死にするだろうし、自制心働かずに私利私欲に動いてしまうと、世界が驚異の竜巻に飲み込まれてしまう

であろう。

最後はきつと自滅。

良くできてるのか、適当に出来ているのか、分からないな、この世界。

進化し続ければ、先がなくなるから自爆。

退化し続ければ、言うまでもなく無くなる。

きつと誰だって、最後に行き着く理想は、普通や平凡なのであろう。

「つまらないシステム」

こう考えてくると、今度は逆に後悔をしなくなるじゃないか、本当に…

多分、この調子で殺人を続ければ、大量殺人者とか言われたりするのだろうか…人の未来を奪ったり、その人に関わり人間までの未来を奪ったり、…

恐らくおれは、姉を殺してしまったら、終わりだと思う。

生きてる人はみんな、終わりがあから、俺にもきつと終わりがあ
る。

自覚がない。

もしかすると、俺に末期の癌が見つかって余命なんか月とか、医者
に宣言されたら、自覚するけど、…死ぬ瞬間って何が見えるのか。

ああ、また話が大きくなりそうだ止めよう。

とりあえず、次、殺す人間かは親だと言うことは、決まりだ。弟が居なくなつて真つ先に、気づく人間。おれを形作つてくれた人。

コンコン

すると、外から密室の空間に、ノックを下す音がした。

ふと、

「なんですか？」

意表を突かれた感じに、間抜けな感じで訪ねたおれ。

「私だけど、ちょっと質問をして良いかしら？」

姉でした。

おれは、ほつとため息をつき…別に、誰か違うお人が訪問しに来たとは思わなかつたけど、…安心感があつた。

「なんででしょう？ 質問とは、ここで話すつてことは、それほど重要視無作為…」

火照つて、言葉が可笑的い。

けれども、冒頭部分だけで話が繋がつたらしい。

「あの弟の袋なんだけど…」

弟の袋とは、主に黒いビニール袋だ。破けやすいのは確かだ。

「袋がどうした？」

「ないの。どこかに、捨てたの？」

「無くなったのか…なら、それはそれで処理の手間が省けたな。気にしないで置こう」

きつと第三者が丁寧に、森に捨てに行つたことを祈る。

「どこに、ゴミ袋を捨てたの？コトシラ」

おれに問いかける姉。正直真実を言って、おれはゴミ袋の在処など知らない。なのだが、姉はおれをとやかく、しつこく訊いてくる。おれには、俺の対応の仕方と有るが、風呂場まで入り込まれてくると堪忍しきれない。我慢の沸点だ。

タイルに転がっていたポリバケツなんかを転がしたときは、最後となるだろう…姉。

僕がせっかくにも、冷めきつたお湯を盛大に頭からかぶるのを楽しみに、冷ましておいたお湯だぞ。ここまで冷めるのに何分かかったと思うんだ？ 10分弱か、15分強か…

とコトシラが被害妄想に浸っている、さなか、満を持して、案の定。

「あら？ コトシラ、これは何？」

ポリバケツに触った。と言うか、触れて中の貯水された水まで触れて窘める。

「ポリバケツ触るな！」

思わず口から零れ出た叫びだった。

これでお障りを続けるのなら、おれは、おれの拳で姉を殴り殺すかもしれない。

「あ、血がまだ、タイルの上に、はびこっているわよ？ 流してあげましょう。」

と言うと姉は、ポリバケツに含まれる、ほぼぬるま湯をタイルの上に垂れ流した。

じよっばー

艶やかな水の滴りと、排水溝へのかすかな轟音とが入り乱れ、おれを破天荒のさざ波に誘ってくれた。

「これで綺麗よ？コトシラ」

姉そう言うのだが、

妖艶までの凛々しさが俺をことごとく、鬱伏せる。

「う、うん、綺麗だね。タイルの美しくなったし、それに、姉もとっても美しいよ。惚れてしまいそうだよ。大好きだ。」

言葉とは反比例とおれの心は、紅蓮色一色。いまにも、口からさつき食べたピザが吹き出しそうな勢いだ。

おれの…楽しみが…

もう怒りを通り過ぎて、姉の胸に飛び込んでしまいそうな勢いだ。だが、今のおれは全裸で防御力零度だ。それに、裸で姉に飛びかかるなんて構図、恥ずかしすぎて、生きてられない。

…それに連動して、恥ずかしさのあまり、姉を殺しかけない可能性だって、零ではないんだ。殺しかける方が断然高い。

もうおれは、人を殺める事に対する罪悪感への免疫力がついてしま

っているのだから…

「あなたの性癖なんてお見通しなんだからね。あはは」

何を言い出すかと思えば、これまた、心無き心を抉るお言葉。この人は、本物の姉なのだろうか？ 先ほどの『袋が無くなったやつてるわよ？』辺りからから別人へと進化しているのでは、なかるうか？

いや、専ら嘘ですから、本物の姉ですから、根強く許してあげましよう。

「一言言いますけどね？ 姉、おれは最後の一時に、盛大に頭上から冷たいお湯をかぶってまた、湯に浸かるのが趣味だったんです。

…どうしてくれます？」

許すけど、詫びたる見返りは求めます。おれは悪い子ですからね。

「まあまあ、コトシラ？ あなたは何かを知った気ている様だけけど、私はあなたが風邪を引かない為にも、やった姉の思いやりだったのよ？ それに、あなたは風邪で一度死んでいます。」

最後の締めくくりが妙に悪寒が走る。

彼女曰わく、姉は何を言っているのでしょうか？ …触れないでおきましょうね。

「おれは死んでなんかいないし、この程度で風邪を引くとは思わない。…現に、今の今まで続けていた習わしだ。耐性はしつかり、保たれている。」

風呂場のタイルに裸足で姉が立っていて、おれがそれを見上げるよ

うな立ち位置だ。おれは、浴槽につかるだけだ。

「…あら…そう、そうね。自分のことも大切に出来ないから、人を葬ることが出来た。あなたは立派な殺人者よ。そして、私も…だから、まず取り敢えずは、体だけは大切にしてお願ひ。」

ん？実にさっぱりしない言い回しだ。元々から何か、抜けているような物言いばかりする姉だけど、ここまで解読困難な出題はあっただろうか？

要は、今後これからも殺人に没するおれたちは、体調管理をしつかりしろと…そういいたいのか？

…矛盾だらけだが、姉らしい意味合いではある。

「う、うん、わかりました。おれはこの日から、ぬるま湯を自虐的にかぶるのをやめます。」

その代わりに、おれにも端的に提案一つ述べて頂かせて致します。

「…その代わりに、教えてくれませんか？」

腑に落ちない事がある。

「何かしら？ 唐突に…」

「どうして、姉はこの浴室の敷地に入ってこれたのか不思議なのです。教えてください。」

しょうもないこと言うのがおれだった。

「どうしてって、それを今ここで、そして、交換条件で訊いてもい

いのかしら？ 損しますよ？」

それでも、無償に聞きたい。なぜ、その様になってしまったのかを、普通自然界ではおかしいこの状況を、

「あなたがこのような趣味趣向も持っているのかと思ってたけど、違うの？」

「え、よくわかりませんが…」

「なら、これは癖なのね。悪い癖」

「に、日本語で喋っていただけます？」

「鍵は、かけるべきよ？」トシラ

「ええ?!、鍵が最初から開いていたんですか?!」

「掛かってなかった、言ってくれろ？」

おれは驚いてた。否定、驚かされた。驚愕の一途を辿る。まさか、生まれてこの方11年間、その癖が定着してなんて…

道理で、ゴミ袋も盗まれるはずだ、…そして、盗んだのは犬だな。事件解決。

「なんだかありがとう、姉、おれまた生きる勇気を貰いましたよ。」

「手遅れだけどね。」

その通り、手遅れだった。手遅れでもいい、所詮、後先後悔するも

ので過去は変えられない物なのだから、

「手遅れ、…手遅れなら、告白しても良いかな？ 姉」

「言ってもいいんじゃない？ 私自身には、どうしても言い話だけど…」

「どうしても良いならやめます。そして、そういう姉が大好きだ。結婚してくれ」

浴室でなんてことを言うのだろうかと思えば、年齢的に全然許される領域じゃないかと、抑制効果。

「言うことはいつたの？、なら、用事は済んだと思うので、行くわね？」

あっさり居なくなってしまった。

と、おれもなんだか興ざめで、これ以上浴槽に浸かることはないなと、最後に色々済ませ、浴室に手をかけた。すると、不思議なことに、鍵が掛かっていた。内側からしか掛からないタイプの奴で外側からは、十円玉的扁平な道具を取り扱わないと開かない構造になっていたのである。

それを外側からなんの仕草もなく閉じたってことだ。

「手品か…いや、魔術だ」

杓文字といい、この手品といい、彼女には何かの力を秘めているというのか…怖ろしいを通り越して、一度で良いから杓文字で殺されたいと思った。

と、同時に、『おれの殺害者は姉で凶器は杓文字だ』とも、願った。叶わないであろう夢である。

コトシラは、いつもそこにある、パジャマに手をかける。パジャマと言うから、それらしいものだと思えば、ただの黒一色の闇に埋もれた色彩の服装だった。

黒い服はよく寝れるの理由で、母に買わせて貰った。何着も予備はある。

それにもう殺人者なら、こんな言葉たつて使える、「ついても血が目立たないからな……」。

いかにも、犯罪者つて陰気がぶんぶんするから、言わないけれども、なんとなく、黒は陰鬱で灰色だ。

いかんいかん、言語が誤った。今日はもう疲れているみたいだ。

「今日の夕食は何かな〜」

過った言語で陰鬱で灰色と、脳内で肯定してしまっただが、おれはそんなことより、姉の夕食が食べたいと思った。

コトシラは歩く。床を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9554z/>

コト姉。

2012年1月4日05時53分発行